



ルー  
テル

# 藤が丘だより

発行 月報編集委員会

発行日 2019年2月3日

No. 57

一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、  
一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

コリントの信徒への手紙一 12章26節



礼拝献花より

## 神と共に 人と共に

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏  
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009  
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: [fujigaoka@jelc.or.jp](mailto:fujigaoka@jelc.or.jp)



## シリーズ説教

### 『苦しみも喜びも』

牧師 佐藤和宏

ルカ5章1節～11節

「エキュメニズム」とは「キリスト教の教派を超えた結束を目指す、キリスト教の教会一致運動」という意味になります。この言葉はギリシャ語「オイクメネー」に由来します。「オイクメネー」は「人の住むすべての場」、つまり全世界という意味になります。これを受けて江口先生は、次のように訴えています。「端的に言えば、全世界の『共生』こそが目指されるべきではなからうか」。

さて、日課に目を向けてまいりましょう。イエスは漁師たちに言われます。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と。「今から後」。決して将来ではなく、今後の努力次第でもなく、一定の水準に達したならでもなく、イエスが選ばれたこの時から後、「あなたは人間をとる漁師になる」と言われているのです。つまり、イエスの選びがすべてであると言われているのです。

実はルカによる福音書だけが、あえて一部の言葉を変えています。それを意識してこの部分を訳すと「あなたは人間を生かす漁師になる」となります。

人を生かすとは、その存在がそのまま受け入れられることによって始まると言えるでしょう。その人の持つ違いを認めて尊重し、そのまま受け入れることで、人は生きるのです。それはまさに、第二の朗読でお読みいただいたように、私たちは「多くの部分」からなっているものであり、それは違っていい、さらに言うなら違っていることこそが、排除されるのではなくかえって必要されているという事実を示しています。しかし私たちは、違う部分とされている誰かの違いを受け入れることができません。傷つけてしまうことが絶えないのです。ですから、私たちは人を生かす一人、人を生かす交わりとなっているか、と問われるならば、できていない自分、できていない私たちの交わりを認めることしかできないのです。しかしこの招きは、私たち人間の事柄ではなく、神の事柄にほかならないのです。それは

将来の目標、私たちに課せられた努力目標ではなく、今、このイエスの口から出たこの言葉によって、私たちが人を生かす群れとなった、人をそのまま受け入れる一人ひとりとなったということなのです。

エキュメニズムは、「キリスト教の教会一致運動」と説明されます。となると、それはあくまでも「教会内」という実に向きな運動ということになります。もちろん、第二バチカン公会議後に始まったカトリック教会とルーテル教会の対話は、50年の年月を重ねて、過去の分裂から交わりへと至らせ、一昨年の10月31日にはスウェーデンのルンドにて、共同の礼拝を持つことができました。「キリスト教会内」という内向きな運動は、大きな果実を結びました。

しかし忘れてはならないのは、先々の共同礼拝に象徴される長年継続されて来た対話の果実は、カトリック教会の奉仕団体、国際カリタスとルーテル世界連盟世界奉仕部が、世界における課題に対して共通認識をもち、協働して奉仕に当たる。この決意がその果実をもたらしたということなのです。つまり、「教会内」に向けら

れた対話を実を結ぶのは、「教会内」で顔を向かい合わせていることから、共に「教会外」へと目が向けられることによつてにほかならないのです。

現在エキュメニズムの運動は、キリスト教会内の一致運動にとどまらず、他宗教との対話へと広がっています。そして宗教内にとどまらず、「全世界のすべて」の一致が目指されるのですが、大いに期待されているのです。私たちは一昨年より、カトリック藤が丘教会と具体的な交流を始めましたが、それは「教会内」に目を向けただけの交流が指摘されているわけではありません。私たち二つの教会がそれぞれの違いを認めつつ、親しく交わりを始めたのは、やがて共に地域のすべての方々へ仕えていくようになるためなのです。

どれほど少なくても、小さくても、違いをもった一つひとつの部分が、苦しみも喜びも共にすることを通して、すべての人々が生きるようになって、この全世界的な希望と祈りによって、真の一致へと導かれるのです。御言葉に信頼し祈りつつ、苦しみも喜びも共に、歩んでまいりましょう。(顕現節第4主日)

# ■キリストの時①

## 尾〇〇〇寿

ペルシャ軍のギリシャ侵寇<sup>しんこう</sup>に対する報復行為として、マケドニアのアレクサンドロス大王（在位紀元前<sup>334</sup>〜323年）は、国内の混乱を平定し、東方征服に乗り出したのが紀元前334年の春、インド西部インダス川上流から下

流に至る全流域に攻め込んだ後、部下に厭戦<sup>えんせん</sup>気分が広がったので、中央部への進軍を断念、やむなく帰国の途につくのですが、前323年7月バビロンアで病に斃<sup>た</sup>れます。（享年32歳）

大王の没後、部将らによる継承紛争が始まり、エジプトとシリアが遺領地を二分して最終決着を迎えますが、狭間にあるパレスチナは、その後長きに亘って両大国の対立係争の舞台と化し、地理的条件が弊害となつてユダヤ民族を翻弄<sup>ほんじやう</sup>しつつ今日に至りました。

アレクサンドロス大王の広範な征服地は、その後二・三世紀の間に大きな社会変革を遂げるのですが、その一つは何といつても最も身近な日常言語に表われ、従来のアラム語が衰

退し、コイネーギリシャ語が共通語として普及します。

大王は、主要な被征服都市に大守や将兵など側近を駐留<sup>ちゆうりゆう</sup>させて背後を固め、東征を続行、被征服地は、初めの武力支配から漸次<sup>ぜんじ</sup>官僚統治に移行し、一般庶民の生活様式も段々とギリシャの慣習が定着、宗教・思想・美術から都市計画に至るまでギリシャの文化が浸透<sup>しんとう</sup>します。

大王征服後の東地中海沿岸諸地域に見られるそれらの社会変化を今日ヘレニズム（ギリシャ文明）と呼んでいますが、古代オリエントの影響を受けつつ成立したヘレニズム文明は、その後、ローマに受け継がれアルプスを越えて西欧思想の基底を形成し、科学を開花させて人類の生活上に大きく貢献しました。

ところで、異なる思想や文化は、初めの出会いにおいてしばしば摩擦発生の大元を作りますが、イスラエル民族の生活規範を形成するヘブライズムとヘレニズム（ギリシャ文明）の両者も、例外に洩れず、殊の外猫廠<sup>ねこあば</sup>を極めたので、それら対立構造の根底に潜む両者の特異性を知ることは、史実の核心に迫ることにもな

り大変有益と思われる。

まずは、両文明の比較検討から入ります。

ギリシャ人の一般的特徴は存在そのものを重視し、ヘブライ人は存在の背後を凝視する、と言われています。

ギリシャ人にとって手で造られたものが神として礼拝の対象になりますが、ヘブライ人は偶像として忌み嫌ひ退けます。

「万学の祖」と仰がれたギリシャの哲学者アリストテレス（前<sup>384</sup>〜322年）は、あらゆる事象の根底に「普遍的な自然法則」が存在し、それらが人間の政治活動から気象まで、地球上の生物や天体の運行など隈無く統合支配しているのです、それらの自然法則を把握することこそ世界理解のアルファでありオメガである、と述べています。

一方、イスラエル民族は、世界を理解する道筋として「普遍的な自然法則」の存在こそが世界秩序を守る神の働きと考え、民族固有の律法を成立させました。

周知のように、後来<sup>しゅうご</sup>の禍を胚胎したそれら両文明の根源的思類対立はやがて、凄惨な事件へと増幅されます。

既に触れたところですが、アレクサンドロス大王亡き後、シリア帝国は代々かつての部将らによって統治され、前175年に即位したアンティオコス四世エピファネス（前215〜164年）は、取り分けエルサレム・ユダヤ地方の住民に対しヘレニズム政策を強行しました。

王はエルサレム神殿にゼウスの像を安置し、礼拝を強要、律法を守り割礼を他人に実施する者や自ら受ける者、つまり割礼授受者双方を同時に処刑する、という勅令を全土に発布し、特に、エルサレム在住のユダヤ人に対し弾圧を徹底したのです。（IIマカバイ記六章）。

アンティオコス四世は国王として「雑多な民族文化から成り立つ広大なシリア帝国をまとめるため、自らをゼウスの化身とし、ゼウス・オリンピウス・エピファネスと称し」自身の神格化を断行しました（前169年）。

ユダヤ民族にとって律法を順守し、割礼に与えることは、選民として真の神への帰属と服従の表明であり、無割礼は、律法違反であつて、神との契約不履行の大罪であります。

何もかも知り尽くしているシリア

の王エピファネスはそれらを逆手に取って、ユダヤ民族の磁滅を謀ったのです。勅令を拒絶する者は、シリア帝国への反逆者とする烙印を押し、死刑をもって臨んだのですから、両者の対立は一触即発の状態に進み、当然のことながら、長期に亘る内戦へと突入しました。

ヘレニズムの波は当然のことながら、真つ先に宗教指導者層を直撃しました。エルサレム神殿では、大祭司の地位をめぐって骨肉相食む事態へと発展します。

ヘレニズムを信奉する大祭司の家

## ■総会開催！

1月27日(日)礼拝に引き続いて、2019年度定期総会が開催されました。出席34、委任25の計59名で総会は成立。諸報告、協議事項等、事前に配付された資料に基づいて順次進められました。その後、役員選挙が実施され、2019年度役員として、7人の方々が選出されました。今回で役員の任を解かれた、○田さん、田○さん、山○さん、お働きに感謝します。



系にあるヤソンはユダヤ・エルサレムのヘレニズム化を広めるため(Ⅱマカ4章7節以下)、シリアの王に袖の下を使い、律法に忠実で敬虔な兄の大祭司オニアス三世(前198年就任・前170年没)を退位させ、大祭司職を横取り、剩え、ギリシヤ風の生活様式を積極的に取り入れ、上層階級の青年たちもヤソンの片棒を担いでギリシヤ文化の定着を図りました。

エルサレム神殿経営は法外な富を懐に出来るので大祭司職は垂涎の的であり、地位獲得をめぐる暗躍は延々と続きます。(続く)

## ■女性会だより

日時：1月20日 礼拝後  
参加者：17名

- 1 聖書の学び…ヘブライ人への手紙 13章7節、9節
- 〜恵みをいただく〜
- 2 女性会総会

2019年度役員  
会長 ○井○子姉

## ■教会の動向



1月の教会は、1日の新年礼拝をもって始まりました。

6日(日)は今年最初の主日礼拝で、顕現主日として守られました。礼拝後には、定例役員会が開かれ、総会準備等を中心に話し合われました。

9日(日)はお仕事会がありました。

13日(日)は主の洗礼日の礼拝でした。15日(火)には、「子育てわいわいワークショップ」改め「仕事サロン」が開かれました。対象を子育て中の方にとどめるのではなく、広く呼びかけたいというスタツ

副会長 ○野○江姉

書記 江○子姉

会計 小○美○子姉

担当 お仕事会：○山姉、津○姉

○木(明)姉、○田姉

物品：○川姉

月報：○木(陽)姉

お仕事会(1月9日)参加者 14名

フの皆さんの声から、名称を変更することにいたしました。16日は聖研がありました。人数は少ないのですが、少人数の良さが出て、自由に語り合える時間となっています。19日は、総会資料の作成作業をいたしました。

20日(日)は、礼拝後女性会総会が開かれました。「女性会だより」に簡単な報告があります。

27日(日)は、礼拝後教会総会が上記の通り開かれ、2月より新しい体制で歩みを始めます。引き続きお祈りください。